第２回　「象徴の貧困」と資本主義の根源的危機

はじめに

貧困・格差といった経済的不平等の問題は、いまやその次元を超えてひとの「生きるちから」の喪失、存在の否定、自己崩壊にまで至っている。二一世紀の貧困の問題をこの次元にまで掘り下げ、その発生源を資本主義のありようとその危機の問題としてとらえかえすこと、これが本講座の課題である。

はじめに、貧困の諸現象を生きづらさの増大という次元でとらえる「新しい貧困」論の諸説を紹介する。つぎにその生きづらさの発生源を「象徴の貧困」として、資本主義に固有な共同性と個体のあり方に求めるＢ・スティグレールの思考を検証する。

一　新しい貧困―「象徴の貧困」

『象徴の貧困―ハイパーインダストリアル時代』ガブリエル・メランヴェルジェ・メランベルジェ真紀　訳」　情報化社会をポスト産業社会ではなく、ハイパー産業化社会＝象徴の産業化の時代としてとらえる

Bernard Stiegler,　De la misere symbolique lepoque hyperindustrielle ,Editions Galilee,2004

１　日本のオタクと引きこもり－『象徴の貧困』日本の読者への序文

日本のオタク、引きこもり－「荒んだ個たちのコントロール不可能な社会」

「個が自分ならびに他への「愛着を失い無関心になること desaffection[愛着が薄れる、興味の喪失、人心の離反]」ひいては個が「廃されてしまうこと desaffectation[建物の用途変更、転用]」2 頁＝「象徴の貧困」現象 3 頁　→　「精神の貧困」―生きづらさ＝自分が自分でなくなるという感覚

東浩紀『動物化するポストモダン』講談社現代新書、2001 年

個と共同性への愛着を喪失したオタク系文化が、同時に日本の敗戦の心的外傷をアメリカのサブカルチャー(アニメ、特撮、SF、コンピュータゲームなど)を道具として癒し、アメリカに対する劣位を優位へと変換するというゆがんだ欲望に支えられている。

「オタク系文化の存在の背後には、敗戦という心的外傷、すなわち、私たちが伝統的なアイデンティティを決定的に失ってしまったという残酷な事実が隠されている」東 25 頁

「オタク的な日本のイメージは、このように、戦後のアメリカに対する圧倒的な劣位を反転させて、その劣位こそが優位だと言い募る欲望に支えられて登場している」東 23 頁

大沢真幸『不可能性の時代』2008 年

上田紀行『生きることの意味』岩波新書、2005 年

→　神戸の「さかきばら」事件の少年Ａ　「透明人間」＝代替可能な自分

２　「実存的貧困」

原田和広『実存的貧困とは何かーポストモダン社会における「新しい貧困」』青土社、2022年

１）　1980年以降の「新しい貧困」現象

①　経済的貧困―「物質的なものの欠損・・個人が所有する貨幣価値が既定の水準に足りていない状態」606頁　＝　**再分配**

↓

②　新しい貧困としての実存的貧困

―「個人が所有する愛の総量が規定の水準に足りていない状態」606頁

「愛着障害を核とした非物質的困窮で、深刻な『象徴の貧困』を伴う状態」608頁

＋

社会的排除とスティグマの実感　608頁　＝　**承認**

『再分配か承認か』ナンシー・フレーザー、アクセル・ホネット、法政大学出版局、2012年

再分配をめぐる階級闘争から承認をめぐる新しい社会運動(アイデンティティ・ポリティクス)へーフレイザー

２）　性風俗産業従業者の困窮状態

・　ヴァルネラブルかつパワーレスな状態に置かれている
・　アンダークラスで社会的排除の対象
・　社会福祉領域からの疎外
・　教育課程や家族福祉からの排除
・　不安定・低所得
・　「職業スティグマ」を負った差別・偏見の対象
・　発達障害、精神保健の問題を抱えている
・　未来に希望がもてない
・　劣等感が強い
・　自我同一性の課題を抱えている
・　自己肯定感が低い、
・　就労によって救われる保証がない
・　生活保護を受給しても救われない

３）　秋葉原事件の加藤智弘

＜実存的貧困の事例＞

・　カミュ『異邦人』のムルソーー実存主義ではなく実存的貧困の小説
・　太宰治

・　東電 OL 殺人事件　佐野眞一『東電 OL 殺人事件』（2000 年、新潮社）

・　永山則夫
・　加藤智弘

　経済的貧困に対する不満ではなく、公共領域での疎外（政治的・社会的市民権のはく奪）でもなく、親密性の領域における承認の不在に苦しむ、ごく身近な人間関係の不在
→　フロム　「人間のもっとも強い欲求とは、孤立を克服し、孤独の牢獄から抜け出したいという欲求」1991 年 25 頁　660 頁
→　気も狂わんばかりの孤立感からのがれるために取る手段―外界の「象徴」を排除すること　660 頁＝オタクの加藤にとっての「象徴」は「オタクの生地・秋葉原であり、そこに行き交う人々」661 頁　→　「自分自身の「象徴」を破壊する自傷行為」661 頁
　白昼堂々、7 人を殺害したのはなぜか？　「彼は自分が生きてこの日本という社会に存在していることを、証明したかったのであろう」661 頁―「生きづらさ」スティグレール
A・ホネット　ヘーゲルの言う「排除された側の破壊的な反作用」＝「他者の注意をふたたび獲得することを本来の目的とする行為」＝「自分という自己を他者という自己のうちに定立すること」662 頁＝「自傷的存在証明」
事件結構の 2 日前、連続して風俗店に行ったのは、性欲のためではなく、「孤立している私にとっては救い」だったから　663 頁
孤独であること、「誰か」に必要とされたいこと、人間として自らの存在を「承認」して貰いたいことを女性に語りたかった　664－665 頁
　駅近くのホテヘルは、自殺抑止のため、「死ぬしー、風俗でも言っちゃおうかな」という感じ　664 頁
　「加藤は、結局愛による「承認」の代替物を得るために、性風俗を利用した・・このような強い対人依存は、「実存的貧困」或いは「絶望的貧困」状態に置かれた人間の特徴である」665 頁

↓

「象徴」＝自分が他者とつながって「われわれ」を感ずることのできるような共同性の場
　→　共同性の場の衰弱　→　自己の喪失

3　超デジタル社会における精神的貧困

西垣通『超デジタル世界』岩波新書、2023 年
関心経済＝アテンションエコノミーーネットでどれほど目立つかが商品と人間の値打ちを決める。→　まったく注目されないものはクズ＝ネット社会の敗者　→　引きこもり、自殺、他者へのからかい、攻撃＝弱者へのいじめ、池袋暴走事故の被害者男性に対するバッシング＝「目立っていることに対する妬み」162－163 頁、排外的ナショナリズム、ヘイトスピーチ、匿名のネット掲示板

↓

日本には匿名が伝統的コミュニケーションにおける重要な役割を果たしていた

オギュスタン・ベルク『風土の日本』－俳句の言葉

「初景色　富士を大きく　母の里」文挾夫佐恵ふばさみふさえ

主語を省いて、「発話者を明示しないことでかえって「言葉で言えないことを感じさせる」「ものごとは本来、互いに結びつき、一貫した流れがあり、その中に人間も溶け込んでいる」167 頁

→　主語を明示することは、この流れを、境界線を引いてばらばらに解体すること

↓

立てるべき問い

では、主語の不在がものごとの結びつきを表していた世界から、他者を攻撃する憎悪の世界へと反転したのはなぜか？　→　われわれのわたしの経験の喪失＝象徴の衰弱(B・スティグレール)

4　「社会喪失」という貧困

『社会喪失の時代』　ロベール・カステル、北垣徹訳、明石書店

まえがき

1）「ある大転換」

「絶頂期の産業資本主義」(「黄金の 30 年」)から脱産業資本主義(1980 年－)へ

賃金労働者が労働組合、社会保障制度、地域、家族、企業といった集団に組み込まれていた資本主義　→　集団的レギュラシオン(「コーポラティズム」＝政労資の協調政治の体制)＝「労働権や社会保障の集団レベルでの調整」22 頁―「雇用と社会保障を集団的に保証するシステム」が機能していた 22 頁

↓

1980 年代以降、集合的労働の解体　＋　雇用のフレキシビリティ

＝「一人の個人であれという命令」24 頁―新自由主義的個人主義

2）この大転換の意味するもの－－ひとびとが「完全なる個人としてふるまい、認められるうえで必要となる条件を欠いている」　→　「むきだしの生」＝「例外状態」の常態化ジョルジュ・アガンベン

個人主義における個人は、近代の歴史的に構築された諸条件に依存している

＝政治的市民権、社会的市民権、集団的権利に支えられて個人は存在した

→　これらの諸条件が解体した世界で「むき出しの生」にさらされた個人がなお強く生きることを求められる時代

↓

3）リスク社会の到来　U・ベック

個人化するリスクの社会＝「生存をめぐるあらゆる不測の事態に対処するための集合的管

理を欠いているため、不確実性が事実上急激に拡大している」30 頁

① 社会保障・社会的保護の脆弱化 ＋ 新しい社会的リスク－高齢化による介護リスク、家族解体のリスク、失業リスク、不安定雇用リスク

② 安全・安心への対応 → リスク予防がもたらす新たなリスク－起こりそうなリスクを予知し予防し管理する仕組み → 監視カメラ、専門集団によるプロファイリング(犯罪捜査による犯人の割り出し、顧客の分析)と分析 → 監視、隔離、予防措置

③ 科学技術、自然開発がもたらす新たなリスク―原発事故、温室効果、温暖化、ウィルス

↓

リスクの肥大化と増殖

４） 所有による個人の定義―「所有個人主義」＝社会加盟者であること

近代的個人とはまず、所有者としての個人である 388 頁

―自然権としての所有権

1689 年ジョン・ロック『市民政府二論』「人間は彼自身の主であり、自分の身体およびその活動や労働の所有者である」388 頁 → 所有は」譲渡不可能で神聖な権利の位置を得る 389 頁

労働所有論(ジョン・ロック)＝「所有の外では自分たちは無であるか、あるいは、取るに足らない存在であり、真の意味での個人にはなりえない」

所有は、市民であることの可能性の条件 390 頁

→ 無産者、物乞いや浮浪者、日雇い人夫、雑役夫は個人ではない、個人たりえない存在。所有者であることは、たんに財産をもっているというだけではない。それは、地位を有するということである＝ 社会的なきずなを有した個人 → Affilier 加盟する、入会する

５） 所有はく奪者＝社会喪失者 desaffilie の大量出現

階級脱落者(すべての個人は社会的絆を持つという想定)から社会喪失者＝社会的絆の喪失者へ

二 「象徴的貧困」と資本主義

１ 生産の貧困から象徴の貧困へ

「「象徴的貧困」というポピュリズムの土壌―「意識の市場化」からの脱出」『世界』2006 年 5 月、176 号 B・スティグレールへのインタビュー

生産の貧困＝19 世紀資本主義が生み出したプロレタリアート＝生産者が機械の自律的運動に従属する、生産者が「作る知」を奪われる＝非個人化－「疎外された労働」

↓

アメリカ型資本主義 ← 利潤率の低減に対する 3 つの解決法

１ フォーディズム(大量生産・大量消費の好循環にもとづく成長体制)消費市場の拡大

→　プロレタリアが消費者になる

　2　アメリカ型文化産業の誕生―ラジオ、写真、映画、テレビ、インターネットによる消費欲望の無限創出　→　大量消費が大量生産を呼び起こす

AV 機器＝「産業的時間対象」「時間のパッケージ品」「それ自体の中に時間性を備えた産業製品」による社会のコントロール　178－179 頁

　3　マーケティング　エドワード・バーネーズ「オピニオンの操作」179 頁

→　消費者の個人的・集団的リビドー(性的衝動、欲動)の制御

２　「象徴的貧困」－「生きる知」の喪失―資本主義の第１の危機

リビドー・エネルギーを親・恋人、宗教・政治・教育といったさまざまな象徴システムによる理想的な「昇華」の対象から消費の対象へと振り向け、商品に固定する。

↓

すべての人がテレビという受像器を通して時間を感じ取る＝同じ時間的商品をすべての成員が受容することによる「生きる知」の喪失＝象徴的貧困

木村敏『時間と自己』―「いま」のゆったりとした広がりのなかに時間が生れ、その時間が自己をかたちづくっていく　→　産業的なパッケージ化された時間は、このような時間を商品化することによって、自己の存在根拠を解体する

「人びとはテレビ番組やレコード音楽を通して自分の「時間」を構成するようになるのです。そのようにして、自らを創造したり、思い出を心に描いたり、自分自身の固有の欲望を生み出したりする「生のエネルギー」すなわちフロイトの擁護で言う「リビドー」を、文化産業に吸い取られていくのです。自分自身のリビドーを、固有の「欲望」として表現し構成していくための象徴的リソースを人びとは失っていくことになる、これが「象徴的貧困」の進行です」179 頁＝「消費者における「生きる知の喪失」　→　「消費者にとって「生きる知」は、もはや自分の生の実地の経験によってではなくて、前もって決められたマニュアルや、取るべき行動を定めたマーケティングによって決定されてしまっています」180 頁→　生きにくさ、象徴的苦しみ　→　「生きているという存在感覚の喪失」→　その感覚を取り戻すための犯罪

文化産業コンテンツによる大衆のリビドーの捕捉はリビドー自体の破壊へと行き着く